

哲学カフェ de ぎふ

せんしゅう

千秋まちかど文庫 通信



運営委員会発行(記録:安藤彰浩、編集:中川健史)(主宰:吉田千秋 090-7917-9602 yoshida0@sepia.ocn.ne.jp)

<2021新年のはじめに> 「コロナ危機と分断・差別を乗り越えて」



<2010.12.9 街頭宣伝>

数え100歳の瀬戸内寂聴さんは、「百年近く生きたこの年になって、戦争時に負けないような歳月を迎えてしまった」と述懐されました。この新型コロナ危機の感染者は年末には世界で8200万人以上となり、日本は相対的に少ないとはいえ、大晦日には過去最大の4300名以上となり、東京だけで1300人以上となりました。医療の専門家・従事者が必死になってもう限界だと叫んでいるのに、抜本的な手を打たなかった政府へ批判はますます大きく高まっています。

日本に限らず、このようなコロナ危機への無責任な対応が生んだ最大の問題は、格差・分断・差別の深まりと広まりだと思えます。

日本でもコロナ対策に多額の税金が投入されてきましたが、政権お気に入りの企業・組織に「あぶく銭」を与え、中小企業・商店への救済の手は十分さしのべられず、そこで働く労働者、とりわけ非正規労働者、パート労働者、外国人労働者は大打撃を受けました。なかでも女性は真っ先に解雇され、あらたな性被害をうけるなど、かなりひどい仕打ちを受けました。

こうして貧困格差はますます広がり深まりました。

加えて、コロナ危機をくい止めるべく全力で支えてきた医療関係者への言われなき差別言動が起きたのはまことに残念です。医療関係者をはじめとするエッセンシャルワーカー(生活上の必須労働者)は、<Go to ~>の恩恵を受けてないのに…スマホ、パソコンなどの器機を使えない人たちも。こうした差別をもたらす政策・措置はそもそも問題なのはあきらかでしょう。

コロナ危機と絡んでのはげしい分断と差別は、アメリカで最も顕著になりました。言うまでもなく、トランプ大統領の根強い人種差別政策が主因ですが、コロナ蔓延を中国の陰謀だとして防止対策をしなかった彼の非科学的な言動は、人種融和を掲げるバイデン候補と真逆なので、さらに黒人差別を助長していったのです。

そういう深刻な状況に貴重な一石を投じたのがテニス選手の大坂なおみさんでした。彼女は全米オープンで、被害を受けた黒人たちのネームを刷ったマスクを、勝ち進むたびに日替わりで着用して試合に臨み、とうとう優勝したのです。テニス愛好家のボクは(残念ながらいま腕の痛みで休止中)、大変感激しました。なおみさんは、「世界中の人にマスクを見てもらい、名前を調べて、その人のストーリーや背景にあることを知ってもらいたい」と話したのです。その慧眼と勇氣に驚き、尊敬の念を持ちました。

コロナだけでなく様々な差別にあつて犠牲になった人は、一人ひとりの異なった苦悶・葛藤・苦痛の物語があります。そこに注視し、その悼み・悲しみに思いを馳せる想像力を養い、いのちの尊さを守り切る気概・思想をお互い深めたいものです。この哲学カフェという小さな場で、ちょっとしたそのきっかけでも見つけ出すことができれば幸いです。

(主宰 吉田千秋)

第149回 例会 2020年12月10日

《激動の世界、新年の展望を語り合う》

《今年はどのような年でしたか？》

「やはりコロナ禍に対してどうすればよいのかの意見が多くありました。だが、印象風によれば、この場にいる人たちは最も困っている人たちとはちょっと距離があるように思いました。目線がもっと下からにならなくては…」

問題提起 吉田千秋 (主宰)



- 第三波のコロナ感染拡大の状況が続いていて、困難な状況は変わっていません。前もって不参加の連絡も幾つかあって、今日の例会に参加者があるか心配していました。いつもより少人数ですが、その分、一人ひとりに十分発言機会があると思います。
- 2020年も最後の月を迎えました。一年振り返って何が思い起こされるでしょうか。個人的な感慨のようなものを別にして、多くの人にとって今年の出来事と言えば、いうまでもなく新型コロナウイルスの問題でしょう。コロナ禍は世界中に拡散して、各国で政治や経済を翻弄する結果となりました。日本でも二月に横浜に寄港したクルーズ船で確認されて以来、報道はコロナ問題一色になりました。しかしコロナ禍に隠れがちですが他に問題がなかった訳ではありません。そういう問題についても思い起こす必要があるでしょう。
- 以下、配布資料の「2020年の出来事」をもとに、主だったものについてふれたいと思います。(この後、年表をもとに主だったことについて話す)
- 安倍前首相の突然の一斉休校「要請」で、学校現場、

教師・親は大混乱。

- オリンピックの開催延期に固執し、緊急事態宣言を遅らせて感染拡大を招く。
- 米国では黒人の警官暴力に対する抗議活動が全国各地で展開。されました。
- 予定されていたイージス・アショアの配備は、大きな反対運動で断念。ました。
- 香港で、中国は民主運動を弾圧し、「一国二制度」の保証を反故。
- 観光、飲食業界を助ける目的で始まった「Go to キャンペーン」は失敗。
- 安倍首相の辞任と同時期に立憲民主党など旧民主党勢力を中心に野党再編。
- 国民民主党の一部は合流を拒否するなど、野党勢力の結集は果たされず。
- 核兵器禁止条約批准が50カ国に達し、2021年1月より発効。
- 日本学術会議の推薦105名の内6名を、菅首相が慣例反して拒否。
- 「維新の会」が強行した大阪都を作る構想の住民投票が再び拒否。
- 米国大統領選挙では、バイデン氏が現職のトランプ氏を破って当選。
- 大阪地裁は、原子力規制委員会が決めた大飯原発再稼働の許可取消の判断。
- 最後に、あらたに開発された新型コロナ・ウイルスに対するワクチンが認可。

意見交流

* 気になったことは幾つかある。安倍氏は辞任直後、早速靖国神社に参拝した。昨年亡くなった中曽根元首相の内閣と自民党による合同葬儀が10月にあった。コロナ禍の自粛で収入が無くなって困っている人が少なくない中、9600万円の国費が使われた。安倍氏

の支援者を集めた「桜を見る会」では、当事者負担の参加費を補うために、収支報告に記載すること無く、安倍氏側から会場のホテル側に多額の金が支払われていた。公設秘書が刑事告発されたが、安倍氏の責任はどうなるのか。コロナ禍で経済活動が停滞し、



多くの企業は雇用を維持することが困難になっている。失業者の数が200万人を越えた。

- * 残念なことは憲法学者の森英樹氏が亡くなったこと。分からないことは沢山ある。核兵器禁止条約にどんな意味があるのか。強制力があるのか。イー・ジョブ・アショアの計画は駄目になったが、政府はあくまでも敵基地攻撃能力を高める兵器を買いつもらしい。アメリカから高い買い物を買われているだけなのか。個人的には何とか食べて生きているから、大きな不満は無い。娘が不登校になって大変な時期もあった。娘は大検を取って、自立してやっている。教育の問題には関心がある。不登校が後を絶たないことにも明らかだが、学校は大きな問題を抱えている。教師の働き方改革を含め、学校教育は大きな転換期にある。
- * (転換期とは何か。どういう風にならなければならないのか。) → 教育関係者は建前を言い過ぎる。現実から目を背ける傾向がある。学校が全てではないが、行きたくない、嫌いという子どもがいる現状を克服しなければならない。規則とかで縛り過ぎる。
- * 教育が変わるべき。米国にある、“世界一素敵な学校”と呼ばれる学校、サドベリー・バレー校を紹介した本がある。大人の価値観を押し付けない。子どもが自分でやりたいことを見付けることが大切。子どもは本来好奇心旺盛で、押し付けなくても色々な事を吸収していく向上心を持っている。校内暴力で荒れる学校がある。暴れる生徒は大体、何をしたいのか分からない子どもである。管理されて、言われた事をやらされているだけでは、何も見つからない。
- * 転換点にあるのは学校だけでない。社会全体が変わる必要がある。学校へ行かなくても生活できる社会になるべきである。教師は本当のことを言わない。ネットを使った教育で必要な事は学べる。
- * 学校が教育の場であることそのものに問題がある訳ではない。重要なことは知識を使う能力を身に付けることで、そのためにはコミュニケーション能力を磨

き社会性を養うことが欠かせない。人間は他の人間と交わることで初めて自分を見出し確立することができる。その意味で学校は異なる様々な人間が集まって互いに刺激し合いながら自分を発見するのに最適の場である。残念ながら学校教育イコール受験勉強になってしまっている。全ての者が数値化された単純な基準を唯一無二の価値として受け入れることを強制される。学校は競争の場となりストレスばかり生み出す場になるしかない。それが問題。

- * つい先日イジメはないと嘘の報告をしていた教師が免職される事件があった。何を目的に事実を隠そうとするのか。誰の利益を優先させているのか。これは特殊な個別の問題というより全般的な問題である。学校の有り方に問題がある。
- * 教師は通常も子どものためと思ってやっている。しかし実際にはそれが子どもたちがありのままの自分であることを妨げる干渉になっている場合が少なくない。
- * 今年2月コロナ・ウイルスの感染が国内で確認され、まもなく幾つかの地域で拡大傾向が明らかになって、政府は接待業を始め様々な業種の自粛を求めると共に、学校の休校を求める要請を行った。要請とは言っても、事実上、強制力のある指示、命令に近いもので、全国の学校は対応に苦慮した。先ずその頃、学内感染はほとんど確認されていない状況で、休校にしなければならない理由も示されなかった。余りに唐突で、現場で責任を負う教師は、子どもたちに何をさせるのか話し合っ、準備することもできなかった。もちろん子ども親も困惑を隠せなかった。
- * 1960年代、日本の教育は、経済成長を担う人材の育成をめざす能力主義、競争主義が支配する様になる。60年代の終わりには、文部省の通達で中高生が政治集会を訪れることも禁止される様になった。戦後まもなく生まれた教育委員会は当初、公選制で住民が委員を選んでいて、自治体の首長による任命制に変わって、委員会そのものの独立性が失われた。文部省は近年ますます教育全体の一元的管理を推し進めようとしている。大学も状況は似ていて、教授会の自主性は失われ、人事権、予算権は形骸化している。大学の教師は雑務に追われて、自分の研究以外のことに時間を割くことが困難になっている。学生自治会も形ばかりのものになっていて、大学の自治は全体として中味の無いものになってしまっている。
- * 教職員組合も、政治問題を議論したりすることは稀

で、政治や社会の問題に発言したりする能力を失ってしまった。

- * 自由学校は以前から存在した。言葉で言うのは簡単だが、現実の問題として、好きな事をさせるということは非常に難しいことでもある。現実の社会で生きて行く力を身に付けるために、何をするかの問題である。
- * 学校を変えるとと言っても、簡単には見通しは立てられない。教育の成果は十年ほど後にならないと見えてこないものではないか。辛抱がいる。
- * 周りから田や畑が消えて行っていることが目に付いた。要らなくなって用水路も無くなっている。岐阜の代表的な農産物を栽培する柿畑も少なくなった。環境が変わるし自分の体も変わって来た。最近自分が年を取ったと感じる。
- * 日本の農業の未来は質の高いものを作ることにあるという。日本人の多くは日本の農産物が質が高いと信じている。しかし現状は厳しい。農業を生業としようとしている人は減少の一途である。食糧自給率が低過ぎる。
- * コロナ禍は、日本の経済が著しく中国に依存していることを明らかにした。多くの人が日本は量で負けても、質で優っていると信じて来た。しかし日本の技術水準が本当に今なお他国に優っているかは疑問である。
- * かつて、政治は二流もしくは三流でも、経済は一流だと言っていた。しかし経済でも日本は最早一流国で



はない。現在の年金水準を維持することは困難だろう。

- * 現在の年金水準は、はっきり言って以前と比べると低下している。今後定年を迎える人たちの年金水準は相対的に更に低くなる。しかし、約束されたものを後から取り下げることができない。保証されたものを実現するのが政治の仕事である。
- * 脱炭素化は本当に実現されるだろうか。政府は2035年までに全てのガソリン車を電動車に変える目標を掲げた。多くの国はもっと大胆な取り組みをしている様に思われる。真剣に取り組まないと世界の潮流から取り残される。
- * 日本で未来を約束する新しい産業が育っている様には思われない。基礎科学の研究レベルが低下していると多くの学者が警告している。行政は近視眼的で基礎科学の研究費が削減されている。政治が成果主義に囚われているために、直ぐに結果の出る研究ばかりが行われるようになっている。短期的な利益を求める傾向がある企業から資金援助を受ければ、短期的に成果の出る研究が優先される様になる。これでは発展の見込みはない。

意見交流の最後に 吉田千秋

・人類は今世界的に大きな分岐点にあると言えるでしょう。気候変動やコロナ・ウイルスによるパンデミックの例にも明らかな様に、多くの重大な出来事は、世界の国々が政治的、経済的に地域の枠を越えてつながりながら、展開する様になっています。現在進行中の危機は、資本主義がグローバル化の下で、国家の政治的な規制の枠を越えて、利益追求の競争を展開し、自然や人間を収奪することと密接に関連しています。その結果、富の偏在による格差拡大、貧困・差別の問題が深刻になり、見境のない資源獲得競争による気候変動を含めた地球的規模の

環境破壊問題を抱えています。

- ・私たちは、現状を変えることで、現在文明の危機を回避することに取り組まねばなりません。もちろん簡単なことではありません。私たちは多くの人が共有できる将来のイメージを描くことができないことと関連しています。以前多くの人が抱いた社会主義への希望は幻想になりました。20世紀の半ばまでに誕生した社会主義国家の大半の実態は、個々の人間が軽んぜられるグロテスクなものに変容してしまいましたから。
- ・では私たちはどういう社会の実現をめざすべきな

のでしょうか。マルクスが描いた様に社会主義・共産主義の社会を実現することはますますには困難に思われます。しかし私たちは、人間が人間らしく生きられる社会、一人ひとりが主人公であることのできる社会を求める必要があります。それはやはり最低限の制度的な保障があって、犠牲となる弱者を生みださない高度な福祉社会であるように思われま

す。日本が平和や人権を尊び、環境保護を大切に、他国から尊敬される国家であって欲しいと思います。実現は容易ではありません。でも、この心構えを大事にしなければなりません。少しでも人や自然を犠牲にしない持続可能な社会の建設を目指して地道に努力する必要があるように思います。

みなさんの感想など

○<「通信No.149」の感想>

コロナ禍で例会を2回欠席した。送っていただいた通信第149号を読みました。「問題提起」や「意見交流」を読み、私が持っていた「しっかり構えたアメリカ社会」との印象に、「生きているアメリカ社会」の印象が付け加えられた。落ち着いたらまた出席します。(アダム・スミス)

○コロナ禍のため参加者が通常の半分くらいだったが、当分は仕方がないと感じた次第。しかし、その分みんな余裕をもってワイワイガヤガヤ。楽しかったですねー。今年1年を振り返ってみると、国の内外で大きな社会的・政治的事件が続発していたことが、改めて千秋先生の「出来事リスト」から再確認できた。コロナパンデミックでうやむやにされてならないのは、また忘れてはならないのは、安倍前首相の「森友学園」「桜を見る会」…など枚挙に暇がない醜悪さわる不祥事。さらに後継の菅「奸佞」内閣が早々に、何を血迷ったか「学術会議会員の任命拒否」という、暴挙。合理的説明なしの「俯瞰的総合的判断」とは呆れた話である。初等・中等教育の政府権力支配はついに、大学の学術・教育全般にまで及ぼうとしている。その先に待っている「国民総支配」を予測すると、コロナ以上に、恐ろしい気分になる。(MS)

○今年を終えるに当たっての、私の一番の関心事は、日本学術会議です。この問題については、興味ないわ〜という人、多いです。でも今、私達が政権の暴挙を許してしまったら、今後もっと締め付けが厳しくなります。大学にはじまりTVや新聞、そして文化的な場で、影響力のある所から口を出すと思います。私的な話で恐縮ですが、私は小説を読む事を唯一の趣味にしています。素晴らしい小説に出逢う事には、新しく友人ができるのと同じ喜びがあります。だから私は、この国の自由が脅かされることは、何としてでも阻止しなければなりません。小説家が素晴らしい作品を生み出せるのは自由があればこそ。制限されたら小説家の先生方のモチベーションが下がるのは自明の事。面白い小説が読めなくなるなんて、私の生活の質が下がります。学術会議の問題は、学者さんだけの話ではあ

りません！！

それから、自民党は、どうにかして学術会議を民間団体にしながらありますが、コロナ対策を見ればその理由は明らか。日本医師会や東京都医師会がどれだけ声をあげようとも、政府は政府の分科会の話しか聞きません。政府の認めたアカデミーでなければ、政策チェックの意味がなくなってしまいます。

今年は本当にうんざりな一年でしたが、だからこそ、私は抵抗し続けるぞ、と決意しました。この世界の未来のために。Peace!!
(二俣佳織)

○2020年は友人が引っ越し、コロナの影響で自粛生活が始まり、自宅勤務となり、誰とも話をしない日が続きました。孤独感が強くなり、精神的に弱っていきました。一人はダメだ、結婚したい！！

電話やメールやZOOMで人と関わっても、相手を感じきれない。やっぱり、会って話をするのがいい！！でも、マスクをすることが日常になって、本当は異常な風景で目しか見えないから、誰だかわからない。2021年はもっともっと周りの人と心を触れる関りをしたい。

「大事なことは何なのか」とことん考えていきたいです。哲学カフェのみなさん 今年もよろしくお願いします。
(子猫)

○2020年は4つのうれしいことがあった。一つは大阪都構想に大阪市民が3度のNO！をくださったこと。維新の会と憲法改悪勢力がつながり、地方自治制度そのものを崩そうとしたことを止めて、維新の会の代表・松井氏の今期限りで政界引退を表明させたこと。二つめはアメリカ大統領選でバイデン氏が選ばれること。三つめは中学校の歴史の教科書の採用に、日本の侵略戦争をゆがめて記述されている育鵬社の教科書を採択せず、来年度から別の教科書とした自治体がふえたこと。4つめは核兵器禁止条約が発効したこと。原爆投下から75年、あの未曾有な殺りく機を禁止しようと決められたことは、うれしかった！小国が大国を屈しさせたあのベトナム戦争の勝利のように、世界の小国がこぞって核保有国や核の傘のもとにあ

る国々と国民に揺さぶりを与えていく。先頭にたって訴え続けられた被爆者の方々へ深く感謝する。そして人類は見捨てられたものでない！と強く思った。(尚)

○2020年は、もともと内在していた現代社会の脆弱性が、コロナのパンデミックや気候変動という形で具現化した年でした。ひょっとすると前の社会、行動様式に戻ることはできないのではないかという予感が強くします。そんな感覚ですので、来年に向けていろいろな疑問が脳内に浮かびます。例えば、コロナによる既存の産業構造、経済構造の変化はどれくらいになるのかとか、エッセンシャルワークの賃金はなぜ低いのかとか、持続可能かつ多様性を担保した家族形態とは何かとか、排他性のある程度少ない共同体は可能かとかなどです。現実の生活ではいろいろな困難な問題が起きてくるでしょうが、その対応だけに埋没しないよう、せつかく100年に一度の大イベントが現実には起きているわけですから興味深く観測していけたらなと思っています。(たなか)

○今後のことはよくわかりません。来月や半年後、1年後も、日本や僕がどうなっているのかさっぱりわかりません。人類がほとんど経験したことのないことが起きた2020年の翌年なんて、てんでわかりっこないです。ただ恐らく誰もが同じように思っていることは「幸福でありたい」ということかなと。この世が1年でガラッと雰囲気を変えても、自分自身が幸福でありたいという願望は恒久的なものであります。前例もなく不安定の中で安定感を得るのはとても難しいことなので、「どうすれば自分は幸福なのか」というテーマに沿うことが、わかりっこない2021年で生きる芯のようなものになる気がしました。(カモノハシ)

○約99%の学校が3月2日から授業などの業務を停止しました。「要請」がいくつかの点で不適切なものです。行政の長にも関わらず、その仕組みを無視しています。感染症対策(CDCの暫定基準等)にもなっていないし、その場しのぎの権力者に付き合う必要はないです。労働者、市民(国民)の戸惑いや苛立ちや困難などに寄り添うことが重要なのです。

学校は法律で設置したところが休むことを決めます。設置者(自治体、学校法人)が作った学校は「監督」下であり、教育の地方(住民)自治です。学校は学校医や保健所と、健康・安全にかかわる援助や指導を受けます。インフルエンザ等の感染症での欠席があると、相談し、設置者の教育委員会に報告し、その範囲と期間を決め、授業を停止します。

そういう自治をみんなで確認したいです。文部科学省は週替わりのQ&Aで対応しましたが、「通知表の法的根拠はない」、「標準授業時間数を下回っても構わない」等等驚くばかりです。でも学校は子ども、保護者、教育関

係者のものです。(ひで)

○2020年は、コロナ禍という人類の危機の中、異例つづきの年でした。被団協総会は文書総会でした。「ヒバクシャ国際署名」連絡会の会議、多くの被爆証言や取材、原水爆禁止世界大会など、そのほとんどがオンラインで開かれました。オンラインは顔を合わせる会合に比べ、神経を使い、大変くたびれます。

同時に、人類に大きな希望を与える年になりました。「核兵器禁止条約」の発効が確定したからです。発効の2021年1月22日は、1945年8月に核兵器が人類の頭上にさく裂した日と合わせて、人類史上銘記される日となるでしょう。

日本被団協結成65年の年頭に、原爆で非業の死を遂げた原爆最大の犠牲者死没者と被団協を創り、運動を続けてきた先達に条約の成立を報告します。「人類が二度とあの“あやまちをくり返さない”こと、原爆から生き残った私たちにとってそれは、歴史から与えられた使命だと考えます。この使命を果たすことだけが、被爆者が次代に残すことのできるたった一つの遺産なのです」(『原爆被害者の基本要請』)。

被爆者は超高齢化し、残された時間は少なくなっていますが、「歴史から与えられた使命」を果たすために、生き、たたかいます。(木戸季市)

○「民意を発信したビックな年」になりました。3月市議会で一旦決まった

「長良小プール」が入札不調を理由に「建設中止」とのニュースに、我々住民がショックを受け、調べてみると市教育委員会が市議会にも諮らず、勝手に建設中止を決めたことからの迷走だった。ここで我々住民がとった行動は「まだ望みはあるので住民の声を署名で提出しよう」でした。11月議会中の11日に824筆の署名(現在、追加含む1000筆超)を市長に提出し忘れられない日となりました。

その甲斐あって11月議会では、「速やかにプール建設を促進する決議案」を全会一致で可決。その2日後には市教育委員会は臨時会において「長良小プール建設」を決議して前進しました。今回は「あきらめなくて良かった。声は発信しなくては」の思いでいっぱいです。今後もこの経験を糧に民意を発することに心がけて行きたい。(井口)



＜世界一周貧乏旅 その17＞「オックスフォードサーカス(後編)」

僕は人々と反対方向へぐんぐん進みましたが、横を駆け抜けていく人がいなくなったころになっても、そこには爆発の跡も殺人鬼もおらず、ただ先ほど同じように困惑顔の人々がうろうろしているだけなものでした。

先に明かしてしまうと、今回の事件は誤報だったのです。駅とその周辺で発砲があったと通報が複数あり、警官らが出動し「テロ関連の事件であるかのように」対応したのですが、結局なんの痕跡も見つからなかったとのこと。駅から走って逃げる人や警察の避難勧告、そして相次いでいるテロへ恐怖心から大混乱へと陥ってしまったようです。

その後無事家へ帰り着き、後日この誤報のニュースを読んでいると、あれ、と思いました。思えば、2度目の人の大群を引き連れた男女は「あっちに殺人鬼がいる」と叫び、さもその現場から逃げてきたかのような口ぶりでした。しかし今回の事件は駅と駅周辺の通報から始まり、人々が逃げ始めた場所もそこが出発地点だったはず。ということは駅の反対方向から逃げる人は始めからおらず、そもそも危険なはずの駅方面へ、殺されると言いながら向かうのはおかしい話です。

つまりあの若い男女はいたずらで人々を扇動したのです。パニックに陥り混乱した人間は、「こっちだ！」と大きな声で命令されると簡単にそれに従ってしまう特徴があり、ちょっとした演技ができれば今回のような状況で大衆を操るのはそんなに難しいことではありません。彼ら

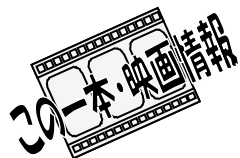
はただのいたずらだったのかもしれませんが、混乱している人々を扇動しさらにパニックへ陥れたのには悪意があります。これはパニック状態の人間がいかに簡単に騙されるかというところが浮き彫りになる事件であります。



僕たちは普段から自分を客観的に見たり、自分の行動が適切かどうか考えたり判断する能力が備わっていますが、それは自分が落ち着いているときに限った話で、緊張している時や非日常に晒されたとき、また命の危険を感じるような場面では尚更に人は混乱しやすく、そんな時人間はあっけなく自分を見失い悪意ある先導者に簡単に騙されてしまうのです。

今回の誤報事件で、結果的に僕がああ男女に扇動されなかったのは、自分の命よりも真実が知りたいなどという酔狂な好奇心によるものでした。ということでみなさま、命を賭しても真実を知ろうとしてください！なんてことはもちろん言いません…。ただ、パニックに陥った時は大きな声の人に流されないようお気をつけください。

(カモノハシタニ)



カロリーヌ・リンク監督『ヒトラーに盗まれたうさぎ』 2019年ドイツ映画

最近ナチス時代のすばらしい映像やドキュメンタリーが続いています。この映画は、昨年ドイツで公開され、「アナと雪の女王」などのハリウッド大作と並んで大ヒットした作品だそうです。

時は1933年。9歳のアンナは、ラジオでヒトラー批判を続けてきたユダヤ人演劇評論家の父が弾圧を受けるようだから、母と兄で急遽スイスへ逃亡することになる。手荷物は限られ、大好きな桃色のウサギのぬいぐるみを置いていかななくてはならなかった。

危機一髪難を逃れて国境を越え、スイスに入る。この間のスリリングな様は、あの「サウンド オブ ミュージック」を思い出させる。父とも合流し、家族一緒に過ごす中、アンナはコリウスおじさんから、ベルリンでは弾圧が始まり、ヒトラーは何もかも奪っていったと知らされる。あのウサギのぬいぐるみも。

さらに苦難は続き、父は仕事がなく、家族内はぎくしゃくする。アンナはことばのなまりや地域の習慣になじめず、いじめにもあって苦難をしいられる。だが友達もできて慣

れたところが、父の仕事がありそうなパリに行くことになる。

だがまたしても言葉の壁。父の仕事もユダヤ系新聞の小さなコラムだけ。貧窮は深くなる一方だが、アンナはフランス語の作文コンクールで優勝、父の脚本はイギリスで出版。ということでさらにイギリスへ逃亡。そこを永住の地と定め、

アンナも兄も立派な業績をあげて名を成す。

この映画は、イギリスの著名な絵本作家ジュディス・オスカーの実話に基づいている。虐殺から逃れた「幸運な」人たちの物語とはいえ、過酷な逃避行にめげず生き、成長していく少女の歩みは生半可ではない。全体主義・独裁国家の過酷な弾圧、戦争の悲惨さ、これらを二度と繰り返してはならない、という叫びが、美しい映像と重ね合わせて聞こえてくる。機会があればぜひ観てほしい作品です。

(Sensyu)



2020年後半 哲学カフェ、第25期の予定

例会は19:00～21:00です。

会場は、ふれあいスペースです。

第151回例会 1月14日(木)	「世の中を明るくするには何が必要か？」 *新型コロナ蔓延が「永続波」となり、ワクチンのみが明るい材料。だがどうか。 *コロナ危機で新たな変革の兆しが見えてきたが、これをどう実現するのか。
第152回例会 2月11日(木)	攻撃優先を進める<理論>と<予算>を問い直す？ *コロナ対策のために膨大にふくれあがった予算は、一体どのように使われたのか。 *その影に隠れて推進される自衛隊の攻撃軍隊化。その危険な理論とムダ予算に注目。
第153回例会 3月11日(木)	「2050年までに温室効果ガスゼロは可能なのか？」 *世界の趨勢にまったく反する政策をとってきた日本政府は、突然、ゼロ目標発表。 *これはCO2ゼロではなく、原発も含めているまやかしのもの。これでいいのか。
第154回例会 4月8日(木)	「教育で大切なことは…コロナ危機を通して？」 *コロナ危機の中で、教育のあり方、内容、制度は変えざるを得ないことが生じた。 *少人数教育へ一歩踏み出したが、リモート教育の推進、管理主義、高い教育費は？
第155回例会 5月13日(木)	未定
第156回例会 6月10日(木)	未定
第157回例会 13周年記念行事	7月3日(土)or 10日(日) 創立13周年記念行事 *昨年はコロナのため中止。今年は何とか開催できるように願っています。 *今年はどうのような内容にするのか、早めに意見を寄せて下さい

哲学カフェの運営資金の協力も、よろしくお願ひします。口座記号・口座番号 00810 1 142912

加入者名 哲学カフェ de ぎふ、千秋まちかど文庫

「哲学カフェ de ぎふ」ホームページ 毎回更新中!! <http://tetsugakucafegifu.jimdo.com/>わいわいがやがや
アラカルト

★2020年は未曾有の事態に遭遇しました。その中ではっきりしてきたのは、指導者の明確な政治理念に基づく確かな方針の大切さです。国民は様々な角度から政府＝権力のやりかたに批判的な意見を持っています。その鋭い表現の一つが川柳でしょう。

★朝日の「令和落首考」材料に、コロナ対策などを中心に、メドレー風に、いくつか並べてみましょう。最初は穏やかで、クルーズ船絡みで、「大船に乗ってる気分じゃありません」というものでした。

★その後、唐突な一斉休校要請で、「丸投げを断腸と言う脳天気」と厳しい批判があり、「瀬戸際と言って検査もしない国」と続く。安倍首相による黒川東京高検検事長問題も、「賭マージャンまさかという坂転げ落ち」という次第。

★7月に強行した<Go To ~>政策以降、政府の無策・愚策・失策への批判は痛烈になってきま

す。横文字だと何となく引き寄せられるが、縦文字で直裁に表現すると「遊ぶ人私の税金で助けてる」——税金を使って楽しむ人の背後に、時間も金も無いコロナ犠牲の人、必死になって命を助けている人たちがいる。「Go to を横目で見ながら職探し」

★遅策・無策・無責任は菅新首相も受け継ぐ。第3波の嵐に専門家が悲鳴とも見える警告を発しているのに、どこ吹く風の経済重視。あわてて停止に切り替える。そこで、「考えていませんでした昨日まで」、「遅かりし菅之助停止令」、「メルケル熱弁こちらくガスー」…何というこの落差。

★最後に、やっとバレたサクラ国会答弁虚偽。「国民を118回虚仮(こけ)にする」。だが不起訴。「花の下腹を切らずに尻尾切る」。これで終わらせていいのか。そんなことはないはずだ。新年も怒りの声を挙げ続けなくては…。

(吉田千秋)